

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

ゆうの最期

「五郎太、私ね、家でじっとしていてもずっと意宇川の工事が気になっていたわ。ここまで岩を削る音が聞こえて来るのですもの。もう随分工事は捗っているのでしょうかね」

ゆうは五郎太に尋ねた。

「さようございますね。私もこのところ、現場に出掛けておりませんが、旦那さまのお話ですと、もう完成間近だと……」

五郎太は答えた。

「五郎太、行ってみたいわ。お父さまがあんなに一所懸命になられたお仕事を見てみたいわ。どのように仕上がっているのでしょうかね」

「お嬢さま、滅相もございません。そのお身体で意宇川の工事現場へ出向くなど、命を捨てるのと同じです。やっと少し、お元氣になりましたのに。すっかり良くなりましたら、いつでも完成した新川を見に行けます。私を困らせないで下さい」

五郎太は引き留めるのに必死だった。

「五郎太、私が今までに、こんな無理を言ったことがあるかしら？ぜひ聞いてほしいの。五郎太が連れて行ってくれないのなら、私一人で行くわ」

ゆうも譲らなかつた。

「困りましたなあ」

五郎太は、ほんとうに困り果てていた。

それから暫く経った、暖かな春の早朝のことだった。大八車に蒲団を敷き、寝たままのゆうを乗せて、ゆっくり、ゆっくりと進む五郎太の姿が意宇川の川土手に有った。



画 高田勲

「お嬢さま、御気分が悪くなりましたら、すぐと言って下さい」

ゆうを気遣う五郎太に、ゆうは、ゆっくりと答えた。

「五郎太、無理を言ってごめんなさい。私ね、もう長く生きられないと思うの。だから、お父さまが総てをかけてなされたお仕事が見たかったの。お父さまは、すばらしいことをなさったのよ。五郎太、ずっとお父さまを助けてあげてね。私の分までよ」

意宇川の川普請の完成を目前に控えた秋の初め、ゆうは五郎太とクニに看取られて二十歳の生涯を終えた。

そして、間もなく、孫娘を追うように彌兵衛の母サトも静かに息を引き取った。

そっと、彌兵衛を見守ってくれた掛替えのない二人の死に、彌兵衛は部屋に籠り、声を殺して泣いた。

正徳元年（一七二一年）秋、意宇川の川普請は第二期工事を終えた。

彌兵衛、六十一歳であった。

五年間にわたる意宇川の第二期工事が完成し、日吉村は、ようやく落ち着きを取り戻していた。

彌兵衛が自費で剣山の岩を切り抜き、新川を作り、旧河川の跡に新田を作り、その工事を遣り抜いたことを村人たちは、少々、後ろめたい気持ちで見ている。